

浄土

九月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿一日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省「特別授子証書」第三五二号
昭和四十年八月二十五日 印刷 昭和四十年九月一日発行

第三十一卷

第九号

吉祥天

東大寺三月堂蔵

静かなひとみと何かを訴えようとしている唇。それに強い意志を秘めているかのごとき吉祥(きちじょう)天女。天平びとはこの吉祥天に天下泰平と五穀豊穰とを祈ったが、その底には母親への思慕と母なる大地への憧れに似たものがあつたからであらう。この祈りに対し、生きて行く人間の苦しさ、悲しさ、さらに、それらにたえ抜こうとしている美しさを、じつと凝視しつつけながら、どうしたならば人々に幸福を分かつことができないか、どうすれば幸福をさとらせることができるだろうか、とこの吉祥天は考えめぐらしているのである。あのひとみと唇がそれを暗示している。静かな顔は決して沈みきつた静けさそのものではない。不動明王が背中にたぎらせている炎よりもはるかに熱い、はるかに明るい光と熱とを、その内側に秘めてしかも、人々の不幸とともに耐えぬこうとする原動力をつねに保ちつつけている。

破損も痛々しい塑造(そぞう)のこの天女は三月堂の一隅にひっそりとたたずんでいるが、長い年月を人々の祈りと人々への思いやりとではげ落ちたともいえよう。剝落した仏像には人間の祈りがこめられていて、とくに美しい姿に考えられてくる

(石上善応)

—目次—

巻頭のことば 念仏と秋風	(1)
随想	戸松啓真・前田池蓮・島田清之.....(2)
謙虚な願い	白旗 憲佑.....(4)
ヴェトナム雑感(2)	福島 淳喜.....(6)
— . — . — . — . —	
すばらしい祐天の法力	松崎仁三郎・中島正方.....(14)
近世文名録 颯田善堆僧正	高橋 良和.....(10)
仏教人生訓 わが身を損うもの	宝田 正道.....(12)
浄土のこよみ	大橋 俊雄.....(18)
一言法談 お釈迦さまと阿弥陀さま	渋谷 賢応.....(20)
家康と三河一揆	鶴田 湛泉.....(22)
ご法語をいただく	村瀬 秀雄.....(9)
記主忌御親拝随行記	安居 香山.....(26)
創価学会の手引き	(32)
編集後記	(33)
— . — . — . — . —	
日本浄土教物語 良忠門下の分裂と発展	(28)



ふかく信じてとかくの沙汰に及ばず。
たゞ念仏を申べきなり。

法然上人御法語

念仏と秋風

短文を求められて、わたしは宗祖の語録を開いた。そこには念仏のおしえがさまざまの形で説かれている。その中から、何かをつかみ出して、これをまとめてみようと思つた。しかし、そうした努力をすればするほど、それは単なる文字として、わたしの脳裡をむなしくとおろすでしまって、求めるものは何一つのこらない。

そこで、念仏をと覚えてみた。十分、二十分、三十分と木魚を叩いて称名した。森閑とした真昼の寺の本堂でのひとときには、何か、身にせまつてくるものが感じられた。だが、そこから得られる何ものもなかった。

町へ出た。残暑のきびしさはアスファルトをとかしてねばついている。素裸の労働者が鶴薮をふるっている。リンリと汗が流れている。無心にその姿を眺めるわたしの心耳に、突如として「念仏」がきこえてきた。鶴薮の一ふり一ふりが、六字の名号となって、わたしの胸に響き入ってきた。念仏とは求めてとなえるものではない。また、求められてとなえるものでもない。——ところが、そのような念仏がとくに職業的念仏者に多いことが、秋風とともに肌身に感じられる此頃である。

二十年の歲月

戸 松 啓 真

(大正大学助教授)

終戦の日から早や二十年の歲月が流れた。

昨今、ようやくシベリヤの墓参が許され、遺族の墓参団がイルクーツクやハバロフスクを訪れたという新聞の記事を読んだ。かつて、私のぞくしていた部隊がイルクーツク市及びその附近に抑留、労働に従事したことがあるし、その上僧侶という身分がら、当時収容所の病死者を埋葬供養したので、感慨無量であり、あらためて冥福をお祈りしたのである。

新聞には、遺族の方々がイルクーツクの日本人墓地で花をあげている写真と、大鵬がハバロフスクの墓地で供養のため土俵入りをしている写真がでていた。それはいずれも、コンクリートの枠の中に土盛りした一名ずつの立派な墓である。しかし当時は、こんな立派な墓地も墓もなかった筈だがと、よくみると写真の下に、新しくつくられた日本人墓地とあった。当時の状況を考えると、写真のよう

悦びの生活

前 田 池 蓮

(寺 庭 婦 人)

真の幸福とはどんなものであろうか？ と

常々考えていた私は今日いま現在が全く悦びと感謝の日々でございます。これでよいのであろうかと時々考えさせられますが、そんなこと心配は入らないのだ、刻一刻をお念仏の中に生活させていただいておれば、何の心配も入らないのだと勇気を出して一層励ましのお念仏が出てまいります。

こうした心境に辿りつかせていただいたのは去りにし七年以前の今日この頃、ある寺庭の婦人として一心にみ仏に仕えての二十六年間、住み馴れた寺院から納得出来ぬまま別れを告げねばならぬ事情に迫いつめられ、悲しい淋しい谷間をさ迷う時、あるところから、「是非私方にお出下さい」と力強く心から請じられ「お疲れであつたでしょうから、一年位はゆっくりとお休み下さい」と温かい言葉を以ってお迎え下さるままに、おまかせして

親馬鹿

島 田 靖 之

(大正大学教務主事)

この頃、一年七ヶ月になったばかりの息子が、父に似ず馬鹿に早起きである。五時頃ともなると、もう起き出して、朝の仕事に忙しい母を手こずらせる。つい母が邪魔物扱いにするので、父の所にやってくる。

こちらが、未だ目を覚さぬ中から、ゴソゴソとやってきて、あげくの果ては、馬乗りになって、バカバカとやり出す。それでも知らぬ顔をしていると、鼻の穴に指をつっこんでくる始末である。

「えいっ」

とばかり、こちらにも我慢がならず、そのまま起きて、朝の勤行に本堂に出掛けて行く。お蔭で、この頃の私は、スッカリ朝は早く起きる様になった。

ところが、この息子、父の後を追って、本堂にくるようになり、十日程たった今日では本堂から変ったリズムが聞えるようになって

な墓地は到底ありえない。終戦の年の十月には、イルクーツクからトラックで二時間位の山間の伐採地ハルハタイの収容所に入ったが、栄養失調と寒さとなれない作業のために相当の犠牲者がでた。はじめての犠牲者の時には、大工出身の日本兵が棺をつくり納棺したが、その時一悶着があった。ソ連側は真裸にして棺に入れるようにという。そこで日本では衣類をきせて生前の持物も入れて埋葬するのが死者への礼であると説明してもだめだという。シャツも洋服も毛布も、洗えばまた他の者がつかえると主張してゆずらない。結局毛布一枚にくるむことで話がついた。寒さがきびしくなるにつれて犠牲者も多くなり、一日に三人四人と棺も墓標もそなえる花もなく、シベリヤの土の下に埋葬された。恐らく他の部隊も同じではなかったかと思う。だからイルクーツクの墓地を参拝している写真をみても、それが日本人の墓地とははじめは信じられなかった。しかし二十年の歳月がたった今日、すべては恩讐の彼方へ去った。改葬された立派な日本人墓地の英霊の冥福を心から祈りたい。

生活させていたどのが現在の境遇なのです。その後何のこだわりもなく善き相談相手となり、又留守番人ともなつて、次々と今迄なし得なかった数々の行事もスムーズに運ばせていただき、身体の調子も誠に恵まれ、昨年は思いもよらぬ沖縄戦跡巡拝団にも加えていただき、夢想だにしなかった米国ノースウエスト号ジェット機で、本土に代つて大東亜戦争最後の犠牲となられた日、琉、米の尊きみ霊に対し親しく墓前に額ずき、ご回向させていだきました事等全く感謝感激でございます。静かに考えますにこれ全く且つての寺院の開山上人始め、歴代人並びに各院の方々の計り知れぬ御導きと御親切の賜であつたと、見直し反省する時、心に浮ぶものはこれこそみ仏のお救いに預つたのであると気付かせていただいたのでございます。

夕食終つて寝につく迄のありがたさ楽しさ、朝めざめてああ手足も動くありがたさ、寝具に感謝して悦びに起き、水に合掌して洗面、勤行、終つて貴い朝食、合掌して楽しい一日の出發。

きた。父が木魚を叩くと、息子が鉦鉦をたたき、興が乗つてくると、あげくの果ては、父からバイを取りあげ、力まかせに木魚をたたき、わけの分らぬようなことを言っている。よく聞くと、

「ナムナム、ウン」

とやっている。まさに門前の小僧、習わぬ経を読むというやつである。

今朝も、昨夜の仕事がたたつて、朝寝をきめこんだのであるが、相変らず、五時頃ともなると、ゴソゴソと、猪の様に入ってきたかと思うと、馬乗りになり「バカバカ」とやり、とうとう、鼻の穴に手をねじ込んできた。

それでも、知らぬ振りをしていると、布団を持って行かれた。母の援軍も、一向にききめがない。

「よし、よし、」

親たるもの、子供には勝てない。ねむい目をこすつて本堂に行けば、又チンドンヤまがいの朝の勤行である。これも又、有縁の衆生と思えば叱りもできず、朝の勤行をつづけ

謙虚な願い

——彼岸をひたぶるに求めて——

白 幡 憲 佑

(浄土宗宗議會議員)

秋の訪れを風の音におぼえる余裕は、もはや現代人には求められないのだろうか。

もっとも近頃は冷夏だ暖冬だと気候までもが人間の日常生活なみに季節感を失いつつあるのだから致しかたないことなのだろう。だがわれわれに残されている優れた文化遺産をみてみると、そこには日本人のみが持ち得る豊かな情感が背景になみうつているのを数多く感じることが出来る。この情感のすべてが日本独特の四季に恵まれた風土の所産とは考えないが、いずれにしろ季節感が乏しくなり、機械化された日常生活にあっては人間の情感も又、本質的な意味での生命観も失われていくような気がしてならない。

今夏は戦後二十年を迎えて各方面で、二十年を回顧してが語られてきたが、あらゆる分野で大きな変革がなされたけれど、この変化の底辺を流れる人間本来の生きかたに対する智慧と考えに与えた動揺くらい大きなものはなかったのではあ

るまいか。

「暑さ寒さも彼岸まで」と云われつづいた言葉だが季節的にもピンとこない程のズレが時にはみられるし、この言葉のもつ絶好の日和をむかえて生活に一区切りを律し、心の反省と向上にむかうといった考え方も素直にいまの人々には通じにくいような気がする。

晩夏の或る日、ラジオのスイッチをひねっていると……

「二人で笑いだしましたが、だいたい結婚式というのは殆んどの人が笑うものらしいですよ、あの場合、神主さんや牧師さんのシャベルことを真面目に聞いちゃいられませんね。貴方達だけじゃないでしょう」結婚生活についてのインタビュー番組だが、応待するのは人気をもつヴォーカル・グループの人々らしかったが結婚式とは笑うものだという考えには、いささかオドロカされた。人生の第一歩が結婚式だという厳肅さは現代の若い人々の結婚感に反するのだろうか。笑いな

がら結婚式をすませて、軽い気持ちで離婚していく。

今夏も海へ出かける機会をもてなかった、もてなかったと云うよりも不快な暑さに苦しんでも海への憧れがもてなくなってしまうのだ。海浜を暴走するオートバイ。深夜の海を嘲笑うモンキーダンスと饗宴。大宅壮一氏は「次の世代、すなわち二十世紀後半に対する指導力の欠如がこの状態をうみ出したのだ」と評しているが、それは生きることに対する意義を見失なったまま動物的に情熱をブツつけていく姿であり自己喪失の姿なのである。だが此の騒ぎの一方、同じ世代の人々によって、ベトナム問題を現実点としての平和を守り、平和を叫ぶ運動も熱ほく続けられている、誰しもが共通に希求する平和の問題にしても、「イデオロギーの相違」は対立の世界を露呈してきている。例えば去る八月十四日から十五日朝にかけて赤坂プリンス・ホテルで開かれた徹夜集会にしても主催者側と報道関係者との間に「不穏当で公正を欠く」と云った内容をめぐり問題を起している。はたして平和を純粹に求めたときに不穏当だの、公正を欠くだのの言動が出てくるものなのだろうか。主催者側の或る作家は「結果を考えるより、まずやってみるんだ」とこの集会の在り方を語っていた。笑いこけながら結婚式をすませる人々。血と肉だけのエネルギーを発散させる人々。見る前にとび、考える前に行動す

ることで平和を築こうとする人々。どこかに共通点があると共に、どこかにクルイがみられないだろうか。あれこれと移りゆく現実をみつめると秋風も心にしみる涼しさを与えてくれない。しかし時の動きが、どんな方向に進もうとも現実一眼をつぶり、現代に背をむけることは許されないのだろうか。それは許されない。何故ならば人間に本当の彼岸を求める心と情感が失われたことをたしかめるまでは。

ひっそりと咲く秋の七草が月影にうつし出される季節のあの限り、人間の心と情感をとり戻す努力をあきらめてはならない。そこに念仏者の生きる道があるからだ。

熱ほく平和を斗いとられんとする人々よ、一つのイデオロギーを基盤にして互いに平和を論じ合っても果てしなく対立は続くだろう。平和とは斗いとるものではなく、生かされる喜びを先ず静かに念ずることから再出発すべきではなかろうか。パーミュダ・ショーツでイキがる若者達よ、饗宴の後の空しさを秋の海が静かにおしえているではないか。

現実の解決を、たんなる政治や経済の力に頼ったならば、衣食足りても礼節を知らない社会が造り出されてしまう。いま、われわれは素朴なる姿、義なきを義とす人間の心の故郷にたち戻り、謙虚な願いのままに彼岸への道を知り、知らさなければならぬだろう。

ヴェトナム雑観(二)

—動乱のヴェトナムに使いして—

福島淳喜

丁度、滞在中ヴェトナムの孟蘭盆にめぐりあわせたので仏教寺院からの招待もあったので毎日毎日午後寺院を訪問して盆風景も見る事が出来た。舍利寺では住職(ヴェトナム統一仏教会会長で八十五才)とも約一時間会話し意見の交換もした。ユエに行っても各所の寺院の招待あり、靈光寺では夜おそくまで住職とも会談した。私は今回の役目が国の使いであるから政治的な話は遠慮した。それはキリスト教徒から日本使節は仏教徒援助に来たといわれるようになっては大変だからである。けれども仏教徒達は何れも日本の援助を希望し、特に日本仏教徒の物心にわたる助力を期待もし熱望もしていた。ヴェトナム仏教は我が国と同様に大乘仏教である。宗派としては禪、浄土が圧倒的で、現在仏教徒は八〇〇万といわれている。

信仰厚く戦場で弾に倒れ生死にさ迷う刹那には母を呼び仏の名を呼ぶそうである。このような仏につかえる善良な仏教徒に困難なく平穏な日を送くらせてやりたいものである。医療、薬など送って救助の手を差しのべてやりたいものだとは強く感じた。

ヴェトナムでは皮膚病が多いが医者是不够少ない、結局手当が出来ないから色々な病人が多い。又貧乏であるから医者にもかかれない。医者は全人口一四〇〇万人の中、全国で約七〇〇位であるといわれる。人口二万人に一人の割合で、それも都市に医者が集中している。村落の七〇%は無医状態である、したがってヴェトナム人は病気になるれば死を意味するのである。寺院をまわっているときに病人がいたので仁丹をやったら非常な喜び方で二、三十粒手掌にあけてやると五、

私が寺院をまわったときは輪袈裟を掛けていたので、みな合掌の礼をもって迎えてくれた。信者は堂内に溢れ、経本を持って大きな声で読経していた。兵隊が隊伍をととのえて堂内に不動の姿勢をとり長跪礼拝して順々に出て行く風景もみられた。ヴェトナム人は仏教

六粒飲んであとはしまつてしまふ、薬は尊いものなのだ。日本から連れていった医者は大変喜ばれ医者は休む暇もなかった。厚生大臣に日本から医者を呼んであげようといったら、大臣は駄目だ、今度のように奉仕の医者であればよいが、開業であるならば駄目だ、それはこの七〇〇人の医者達が組合をつくつてい

るので、もし

日本から開業

医が来れば自

分達の収入が

少なくなるか

ら組合に入れ

ないといつて

いた。こんな

ことでもヴェ

トナムの人達

は医者にかかれず気の毒な人達である。

日本は昔からヴェトナムとは非常に深い因縁を持っていた。歴史的に見ても子供達に深いなじみの浦島太郎のおとぎ話も、この地方との関係があるように思われる。浦島太郎は難波してかの国に流れつき白髪の老人として帰ってきたのも



【仏】【教】大【学】(サイゴン)

海流の関係であると思われる。(日本海流は日本海から朝鮮海峡を出て東支那海からトンキン湾を出て支那沿岸から朝鮮海峡を経て又日本海に入るといふ循環海流だそうである)乙姫様のあの服装は現在ヴェトナムの上流婦人が着ているものと同じようである。奈良朝時代に遣唐留学生として海上風

波に遭い安南(今のヴェトナム)に漂着した安部仲麿は再度支那の特使として今のハノイに行っている。又奈良朝時代には仏教僧の仏哲禪師(安南人)が舞楽を我が国に持ってきている。織田信長(天正年間)の時代から徳川時代の初めにかけて日本船の貿易が盛んに行なわれたものである。今回私が各寺院をまわり相当多くの日本人の墓もあるので回向してまわったこともある。その墓石には慈孝ときざんであるのも見かけた。このように我が国との特別関係がある国である。近くは大東亜戦争で進駐した悪夢はあったが、現在ではほとんど悪夢は消え去り、日本の援助に期待をもっている者が多いようである。私は今回南方総司令官寺内大將が司令部として起居していたホテル、マジエスティックに一週間泊まり、その当時の追憶をしながら寝についた日もあり、サイゴン埠頭を初め市内を一望するホテルの五階食堂で食事を摂りなが

らも、なんとかヴェトナムの罪もない民家が骨肉相はむことをやめ一日も早く自力厚生生活の出来る日の近からんことを祈念しつつサイゴンの日をおくっていた。

現在、ヴェトナムの政治は安定しない。内閣や軍事評議会が出来ても派閥あり、仏教徒カトリック教徒、軍部など何れも自己利益のみを考えているので容易に円満な国家体制とはならない。又アメリカの意向を聞かねばならぬから国家体制はかたまらない。現在の南ヴェトナムは軍事は無論のこと、政治的にも経済的にもアメリカに従属せざるを得ない立場にある。南ヴェトナムの財政は国家収入の八十五%まで、輸入総額の九〇%までアメリカの援助だという。アメリカの経済援助でやっているようなものである。軍事方面は勿論アメリカにたよらなければ、たちまちベトコンの手中に入ってしまう。アメリカは軍事に経済に莫大な援助投入をしているが、ゴジンジウム政権の時から中央の政治に一生懸命になっているだけで政治のやり方がわるかった。それ故、援助している割合に民衆から親しみを持たれず、学生、仏教徒あたりからは撤退を要求されている状態である。アメリカはもっと民衆の福祉に力を入れるべきではなからうか。アメリカの一番の目的はこの南ヴェトナムをアジアにおける唯一の拠点としていることである。もし、この地を手離なせばフィリッピン、

ハワイと引きさがり、永久にアジア大陸から消えてしまう破目になるから、北海道の二倍位の小さなところであるが軍隊を送り、諸国の批判を受けながらも死守しなければならないのである。アメリカはついに兵力を五十万までつぎ込む。アメリカのやれるだけのことをやるとジョンソン大統領がいつている。兵力はますます増加しつつありグアム島から大型機三〇機の渡洋爆撃を行なうなどいよいよ大戦争に深入りしてゆく様相を呈してきた。韓国、オーストラリア、ヒリピンの兵力も加わり、一方キューバ北鮮あたりも義勇軍を送るなどいつている。事態は次第に急を告げるにいたっている。中ソもアメリカの気迫に吞まれ手も足も出ないで遠ぼえしているが、中共がどんなことで兵力の介入をするかもしれない。日本はヴェトナム問題では他国とちがう立場にある。歴史的に見ても又東南アジアの経済市場からしても日本の出様によって将来の運命が決ってくる。他国の戦乱と対岸の火災視して安閑としていることの出来ない時期になってきた。日本の中には朝鮮戦争と同じようにこの動乱で儲けようなどといっている者があるが言語同断である。そんななまやさしいことではない。ヴェトナムは愛国心の宿っているのは農民と貧乏人である。我々仏教徒はこの際大いに率先して人道上、平和のためヴェトナムに救いの手を差し伸べるべきではなからうか。

御法語をいただく

源空が、汝に念仏して往生する事は決定して疑なしとをしへしを信じたるは、蓮華を蓮華とおもはんがごとし。ふかく信じてとかくの沙汰に及はず。たゞ念仏を申すべきなり。

(勅修御伝 第二十)

法然上人の年若いお弟子の一人に随蓮という人がありました。随蓮は平常から上人に目をかけられ、承元元年に上人が配所に赴かれるに際しては、数少いお供の一人に加えられた程でありました。

さて、上人がなくなれると、お弟子の中にいろいろと異論を唱える人が出てきました。その内の一人が建保二年ごろ、随蓮を訪ねてこのように申しました。

「学問を積むことなしに、ただお念仏を唱えただけでは往生できません。三心の義を学ばずにお念仏を申しても仕方ありません」

これに対して随蓮は答えました。

「お念仏を申すのに特別な手段方法を必要

としないこと、ただ仏さまのお言葉を信じて念仏せよということ、故上人は教えられました。従って三心については全く教えられていません」

するとその人は重ねていいました。

「そのような故上人のお言葉は、学問のない人に対する方便として申されたものです」

そして経文や註釈を次々とあげて説明するのです。さすがの随蓮も、この詳しい解説にすっかり心を動かし、今までの自分の信仰に迷いを生ずることになりました。

それからの随蓮は、同じくお念仏を唱えながらも、一体これでよいのかと迷う心にさいなまれ、思い悩んで暗い毎日を通すこととなりました。そんなある夜のこと随蓮は夢をみました。

随蓮は独り道を歩いていると、法勝寺の門前に出ました。その西門から中に入ると、池には沢山の蓮華が咲いていました。更に書院の方に進むと、故上人が南面しておられ、懐しそうに随蓮をさしきねいておられました。

随蓮が上人の前に進んでゆくと、上人の方から声をかけられました。

「随蓮よ、お前は近頃自分の信仰について思い悩んでいるが、少しも迷うことはない。ここの池には沢山の蓮華が咲いているが、もし人があって、あの花は蓮華ではない。桜だ。梅だと主張したとしても、果してお前は信ずるであろうか。蓮華は誰が何んというとも蓮華なのである。念仏信仰もそれと同じことで誰に何んといわれても、お前は迷うことはないのである。

私はお前にお念仏を唱えれば、必ず往生できると教えた。お前は私の教えを信じてお念仏を唱えている。信仰は自分の信念を深く信ずることから出発するのである。たとえ如何なる邪見の人が来て、お前の信じているものは蓮華でなくて桜であるとか、梅であるとかいいたてたとしても、お前は決してそれを信ずる必要がないのである」

このお詞が終ったとたんに、随蓮は夢からさめました。その後の随蓮は、故上人の教えをそのまま信じて少しの疑念をもつことなくお念仏の生活に一生を終りました。ここに掲げた御法語は随蓮が夢の中で拝したお詞であります。

颯 田 善 雄 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報取締役)

先に久松鑽瑞僧正のことを書いた七月号を読んでいたら、わたしの脳裡に颯田善雄僧正のことを思い出した。

というのは昭和二十二年も終り近くなったある日である。知恩院の古門前をあがって、黒門の石段のところではったりと颯田僧正に会ったのである。

そうしたら颯田僧正はわたしをつかまえてこういったのである。

「これ、えらいことになった、あんたが浄土宗はこれから若い人によって運営されなくてはならないというたけれど若い人はえらいことをしてくれた。」

といわれたのには面くらったのである。というのはこの颯田僧正のとき知恩院は宗本一体を主張して分裂したのである。

その当面の責任者が颯田僧正でありながらこの問題では心を碎いたものなのである。

颯田僧正は色の黒い、そういつては失礼であるが田舎の和尚さんという感じであった。

長らく知恩院の布教師会長として、布教師会の重鎮であつて、物腰の低い人であつた。

実際いえば知恩院の執事長といった肩書は颯田さんにとつては迷惑であつたかもしれないのであるが、颯田さんは頭の

なかに終始知恩院というものがあつたので、御本山のことなら、知恩院のことなら、千里を遠しとせずに出かけるようになったのではないかと思うのです。

颯田僧正が亡くなって何年かして、僧正の住職地である愛知県河久比の雲谷寺を訪ねたが、その寺の立派さ、その総信徒からの信頼感の深いのにはさすが生前のこの僧正の教化力の偉大さに感心したのである。

颯田僧正には一つの特長があつた。それは同僧正がわたしによくいったが、「わしの字がなあ」というその字である。

字の上手、下手をいうのではないのであるが颯田僧正の字には特長があつて、颯田の立扁の風のはねぐあい、善雄の雄の字のひねりに特長があつたし、その書体には角があつて、一寸まねの出来ない書体であつた。といつても読みにくい字ではないが、この僧正の人格とは異なつた書体が面白いのである。この僧正の説教も、颯田節と名付けたいほどの特長があつて、現在長野県松代の小布施弘学氏はこの僧正を布教上の師範としてゐるので小布施氏の説教を聞くと僧正の倣を偲ぶのである。颯田僧正は茶色の衣がよく似合つた。それも木綿の衣がとても似合つた。というのもこの僧正の純朴さというのか、清楚なところがこのような質素な衣とよく合致したといえるので、昔もそうであつたが、知恩院の執事長時代に

は全く念仏の生活であつた。そうした風格であつたから威張ることなど全然なく、非常に頭の低い、歴代執事長とは一寸趣を異にしたところがあつた。色の黒い、むしろふうさいのあがらないこの僧正が知恩院の廊下など歩いていたら、きつと大殿の常念仏の僧とまちがえられるようなほど質朴な人であつた。然し多少お酒が入るとなかなか愉快に声を大きくして談笑に時をすごすこともあつたが、この僧正は少しもくずれなかつたし、多少たのしくなる程度であつた。

知恩院の執事長になつたときに、

「もっと若い人を使わんとあきまへんぜ、」

とじようだんのようにいつたら、「よし、あんたのいうように若い人を一つ部長にするか」と素直にうけとつてくれたこの僧正の誠実さには今でも感謝してゐるのである。

実際颯田僧正には敵がなかつた。この僧正のことをとやかくいう人はなかつたのではないかと思うのである。

それほど善人であつたし、それほどまじめな人であつたことはたしかである。布教一すじに生きて執事長になつた僧正は、退任後知恩院の副門主という肩書をもつたことがあつたが、あとにもさきにも七百五十年の浄土宗の歴史のなかにおいて、副門主という肩書はこの僧正だけであることからすると、浄土宗の歴史に残る副門主であるかもしれないのである。

わが身を損うもの

宝 田 正 道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

その物につきて、その物を費し損う物、
数を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり
国に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あ
り、僧に法あり。

——吉田兼好「徒然草」第九十七段

この夏の初め頃、江東方面へハエの大群が
来襲して、住民たちが大変迷惑したことがあ
った。原因は、東京都のゴミ溜め場となつて
いる「夢の島」の管理不十分から大量のハエ
が発生し、海風にのつて江東地区一帯に飛来
したものとわかった。都では、自衛隊に頼ん
で「夢の島」の焦土作戦を思いついたりし
て、対策に大奮だったが、そのため、今度は
何ともいえない悪臭が同じ街並に漂い、一時
は住民たちから「悪夢の島」だという烙印を
おされた。都政に対する非難は、さきの汚職
議員の摘発などとともに、一層強く高まり、
ついに七月二十三日の都議選では、自民党に
厳しい審判が下された。

この「夢の島」のハエ騒動は、いわば東京

都が自らの不始末で、世界のマンモス都市大
東京の誇りを自ら傷つけた好例である。また
汚職議員にしても、都民から選ばれて都民に
不信と怒りをかわせた張本人である。つまり
「徒然草」流に云えば「夢の島」のハエも汚
職議員も、「その物につきて、その物を費し
損う物」の代表的な例と考えることができよ
う。兼好が生きていれば、さしずめ、その筆
頭に、「東京にハエあり、汚職議員あり」と
でも表現するところである。

『徒然草』は、隠栖中に感じた折々の随想
を、つれづれなるままに書き記し、後にこれ
を二百四十四段に編集したもので、鎌倉・室
町時代の世相や人心をうかがう絶好の史料で
ある。さて、この一段も、まことに彼らしい
皮肉と辛辣さを加えた処世観の一端を示して
いて今日の人々にも十分通用する多くの示唆
に富んでいる。虱や鼠や賊のことは、先に述
べたハエや汚職議員の例と同じように、万
事、不潔にしたり、管理不行届きのために、
天に唾する如くわが身、わが家、わが国にそ
の害がかえってくる点を指摘したもので、い
わゆる「身から出たサビ」とも考えられる。

ところで、「小人に財あり」という点も、

「小人閑居して不善を為す」という言葉に似て、われわれの深く戒めるべき頂門の一針である。つまり、つまらぬ人間が、その身を減らす元は、お金である。特に、バクチや投機などで急に大金が入ってくると、人間は、とかく俄か成金よろしく、計画も思慮もなく、どんどん使い放題に使い果してしまつて、たちまち元の黙阿弥にかえってしまうことが多いいものだ。小人に金をもたすと、結局、その者自身までダメにしてしまうから、注意すべきである、というのが兼好の意図である。

しかし、彼が一番いいたかったのは、最後の「君子に仁義あり、僧に法あり」という点であつたろうと思われる。

ちよつと考えると、君子に仁義あればこそ君子としての体面も地位も不動のもので、君子自身をそこなうとは思えない。僧にしても仏法を身につけていれば、決して僧自身、墮落したり身を滅ぼしたりはしないはずである。それにもかかわらず「その物につきて、その物を費し損う物」の中に、君子の仁義や僧の法をいれているところが、兼好らしくて面

白い。「君子は危きに近よらず」という諺があるが、世に君子といわれるほどの人は、すべて物ごとに慎重で、うかつな凡俗の仲間入りはおいそれとしてくれないのが、普通である。いわゆる仁義をわきまえているからである。しかし、その仁義に拘泥して形式主義

法に叛いた言行をする時は、彼らにとって仁義や法が、恰好のかくれみのになるためである。

に墮し、時々、とんでもなく非常識で、人間味のない、冷たく非常な言行を、平気でぶちまけるのは、意外にもこういう「虫も殺さぬ」顔と威厳をもった紳士方に多く目立つのも事実である。痴漢や詐欺師や殺人犯に、とかくこの種の二重人格的な君子の登場することは読者も、思い当るふしがあるであろう。これは君子自身、身につけた仁義によつてその身を滅す例である。坊さんの場合でも同様である、と兼好は考えた。平清盛ではないが、法衣の下に武具をかくした形式だけの僧形が、仏法という法のかげにかくれて俗人も及ばぬ悪行を重ねる例は、特に兼好の時代に多く目についたのかもしれない。しかし、古今、その類は無数にある。そして、悪僧の栄えた例はめつたにない。三宝がその身を奈落につき落したからである。君子が仁義を欠き、僧が

われわれは、どうかすると、仁義や、法の名に弱く、君子らしい、僧らしい人間が、もっともらしくその悪知恵を働かすと、ついうっかりと、むざむざその術中に陥つてしまひやすい。人のいい人ほど、その手にのりやすく、被害にかかる率も多いのは、それだけその人たちが、仁義や法を尊敬し信用している証拠であるかもしれない。しかし、人はもっと厳格に、法師と似而法師とのちがいを見抜く眼力をもつ必要がある。君子ぶつた詐欺師や僧ぶつた祈禱師などにたぶらかされて、全財産をまきあげられたり、迷信にひつかつたりする人間の弱点を、兼好はこの一文で教えようとしたのである。仏法を学ぶのは、真剣勝負と考えるべきである。へたに生かじりの信仰をわがもの顔にふりまわすと、法によつて僧はもとより、信者までが、その身を費し損うことを、よくよくこの際、噛みしめて忘れないことである。

すばらしい祐天の法力

松崎 仁三郎

中島 正方



一、祐天の断食修行

増上寺の第三十六世祐天上人は、江戸時代の初、福島県石城郡大浦村（百姓）新妻長左衛門の一人子として生れた。十二才の時江戸に出て、当時の名僧檀通和尚の弟子となり、師匠から三部経の一節を教えられたが、数十日かかっても、一句すら覚えられない鈍才であった。師匠はこの有様を見て、これではとても出家になれる見込みは立たないと、勘当して寺男八助に預けてしまった。祐天は身の腑甲斐なさを恥じて、品川の海に身を投げんとしたが、納所の善長に救われて、寺につれ戻された。そして開山堂にこもって、本尊仏の救いを求めるよう勧められた。すると、開山様から成田不動尊にこまれとのお告げを受けたので祐天はよろこび勇んで成田に

向った。時に十五才の秋であった。所が途中盗賊にあい、路金から衣服まで、剝ぎ取られて進退谷まりながらも、初心をまげず翌日成田にたどり着いた。直ぐ新勝寺に参り、別当にこれまでの成り行き、途中の災難などを委しく申し述べて、全く命がけの決心であるとお願した。別当は大いに同情して、すぐこもり堂に案内し、

これから一心に修行いたされよ。

と仰せられた。祐天は、別当の好意に心から感謝し、草鞋ぞうりをとき、それこそ金鉄をもとかし、岩ももつらぬく大勇猛心で三七日の断食にかかった。

南無帰命頂礼不動明王、我にあわれみを垂れさせられ、智恵の眼を開かせ給え。

と祈願して、昼夜一時もまどろまず、穀水を断つて一七日に及んだ。黄昏時である。見知らぬ一僧が来て申すには、

吾もしばしばこの不動尊に祈請して、御利益を受けた者であるが、断食といつても一七日も経てば、重湯を飲み、これで行者の氣力を補い、又断食するのがならわしである。わたしもこれを飲むから、御身も飢を補われよ。

と、一つの壺を前に置かれた。祐天は、

御志かたじけなく存じますが、自分は三七日の間は、唾をも咽喉へは通すまいと、覚悟をきめたのですから、お断りいたします。

と、引続いて祈請をこらした。斯くて二七日にもなると、身心共に疲れ果てて、骨と皮ばかり、光るは眼ばかりで、まるで生きた骸骨の如き姿となった。ところへ日の暮にまた、六十に余る老婆が現れて申すには、

お前の体は、今や絶対絶命。あと一日もたてば命が危い。

しかしこれまでの念力で、お不動様の利益は疑いないから命のあるうちに、今度の祈願は終るがよい。

と、懇に勧めたが、祐天は聞き入れないで、

御親切忝けなく存じますが、私が今度の立願は、命を惜しむような柔弱の念願ではありません。是非とも三七日の参籠を終えて、まことの不動様を拝まないうちは、たとえ死

んでもこの席は動きません。どうぞ御心配なく御すて置き下さい。

と、これにも応じなかった。察するにこれは、魔王が祐天の心を試しに来たのでしよう。しかし祐天の堅い決心を動かす事はできなかった。そして三七日満ちた曉に、祐天が思わず知らずまどろんでしまったところ、身の丈一丈余りの不動尊が現われた。背中に輝く焰は燃え上り、左右の御手には長短の利剣を握られ、眼を光らせ妙音正しいお声で、

善いかな、善いかな。われはお前が無二の丹誠、不拔の念力に感じて出現したのだ。お前は前世の業障で無智魯鈍ではあるが、ここに方便がある。この長短二ふりの剣の内一つを吞むと、仏の智慧をさずかること明らかである。二つのうち長を吞むか、それとも短か。

祐天は飢えにつかれた身でありながら跪いて、何卒、何卒、長を頂かして。

と大口開いて待ち構えた。すると不動尊は利剣を振り上げ、呪を唱えながら、祐天の口へ、グットさしこまれた。祐天はここに息絶えてしまった。

新勝寺の別当は、夜がほのぼのと明け渡るころ祐天のことが心配になってたまらない。あの行者は身も心も疲れ果てているから、もしかすると助からないかも知れないと思ひこも

り堂に来て見た。すると、祐天は倒れて居り、あたり一面血の海、別当はびっくりして暫くは口もきけない有様であった。

これは唯事でない。このこもり堂は外からは入れないのだから、若しかしたなら、実のお不動の御仕業に相違ない。と、急いで僧を集めて護摩をたかせ、自らも読経して拝念され、

南無不動明王、願くば祐天を蘇生させられて、この有様を明白になされ給え。南無帰ノウマクサンマンダバララダ。

註（どうぞ普賢菩薩よ御助け下さい。）

と、祈られた。すると祐天はフッと息を吹きかえし、ムックと起き上った。暫くして細々ながらも、氣力のある声で

唯今は、数々の思いやり生々世々忘れません。全く立願成就して、実のお不動を拝し、その上智恵も授かりました。

と、その外、利剣のことなど色々と物語った。一座の僧達もアッと感じて奇異の思いをした。別当は、祐天こそ前代未聞の名僧になると感心され、御利生の實際を知りたいと、お経の一節を読んで聞かせた。すると祐天は、前々から知っていた者のように、一字一句あやまりなく暗誦した。まことに不思議なことである。そこでこもり堂から寺につれ帰り、一兩日休息させた上、心静かに江戸に帰られるようにと、様々にもてなしてくれた。氣力も回復した祐天は別当の格別なお世

話で、駕に乗り無事増上寺に帰ることが出来た。

祐天は、念力丹誠の願を發して、成田不動尊に命がけの願を立て、不動明王もその切なる心に感ぜられたか、あらたかな御利生を授けられ、且つは別当の世話で、目出たく増上寺に帰り得た訳である。一山の宗徒、伯父の休波和尚、納所の善長は言うに及ばず八助までが、死罪をのがれたような思いに浸った。そして、不動尊の靈驗と、祐天を挙って尊敬し、老僧達は寄り合って、この不思議な事実を、檀通和尚に言上して、勘当のお許しを願ってはと、これを皆に謀ると、皆の者は是非どうぞということになり、連れ立って和尚に向い、祐天は、命をかけて成田不動尊に、三七日の断食修行をなし、不動尊の真のお姿を拝し、その間にあらゆる智恵を授けられて帰って来たのです。その靈驗を残る所なし申し述べて、この喜びにどうか祐天の勘当を御用捨お願致してやみません。

と、言葉をつくして願出た。すると和尚は、何れも打ち寄って、お取りなし下さった御親切忝なく存ずる。唯祐天の勘当はさて置いて、成田不動尊の御蔭を以って、大願成就して智恵を授かり、物覚えが直ったとは、誠に有り難い話だ。祐天に就ては、生れつき見所があり、そ

の外色々存じよりもあるので、この度は許さない事にす
る。若し然るべき時が来たなら、拙僧から沙汰するから、
それまでは捨て置き下さい。しかし、御歴々の御世話であ
るから、袈裟衣はさし許す。

と、申されて、前に取り上げてあった小袖も許して下さっ
た。老僧達もこれ以上はどうにもならない。それで祐天に向
い、

勘当の儀はお許しないが、右様に袈裟衣の着用を許され、
御思召しも至極上々だから、十分学問を修行しなさい。こ
れからも折があったらお願するから氣遣わないで。

と言ひ渡した。祐天はこれを聞いて、有り難涙にくれた。思
うに、

たとえ勘当はお許しないにしても、袈裟衣御免になつて
は、末の見込みがある。何も急ぐ必要はあるまい。

と悦んだ。さて、祐天は八助に向つて、

そなたには大変なお世話をかけて忝けない。心のままに立
願致した所が幸に成就した。それでお師匠様も少しは御心
もお直りになり、お怒りも和らいで頂いたそうだ。これ偏
にお不動さんのお蔭です。

と、話してきかせ、成田の方を伏し拝んだ。そして一念發起
学問に専念したので三千僧の中で、誰一人として及ぶ者がな

いまでに上進した。八助は自分の事の様に喜んで、この通り
物覚えがよくなり、発明になった事を、是非お師匠様に知っ
て頂きたいと、祐天に

私の部屋はむさ苦しいからお師匠様のお居間に近い小座敷
にお移り下さい。

とお連れした。ある時、祐天が声高々とお経を読んでいるの
を師匠が聞かれて、心中大いに歎んだが、何分にも勘当中な
ので、ほめる所か知らぬ振りで、

八助、あの高々とお経を上げているのは誰か、
と、尋ねられた。八助はこの時ばかりと、

祐天僧は、成田不動尊の御利生で智慧を授けられ、物覚え
が一山の中で一番です。山門の人々皆舌をまいて居りま
す。かく出精なされる御心中、本当にいとほしく存じます。
何卒お憐み下さいます様、取るにも足らない八助めが、折
入つてお願致します。

と、臆面もなく申し上げた。和尚は、心の中では、下郎の身
でありながら、親切者よと思召されたが、わざと、高声に、
八助、お前は勘当中の祐天を、我が居間近い座敷に引き入
れて、声高々とお経を読ませるとは何事だ。無礼千万いつ
もの部屋に移せ。そして遠慮なく使え。

と仰せられた。

赤い曼殊沙華が、葉よりも先きに花だけが大地からスワット出て、真赤に咲くと、もう彼岸がそこに来ている。彼岸花と呼ばれるのも、ゆえあるかなと思う。

浄土のこよみ

— 九 月 —

大橋 俊雄

彼岸は梵語のパーラミター

(波羅密)を訳した言葉で、

「此の岸から彼の

岸に到る」とい

う意味である。此

の岸とは私たちの

住む現実

の世界であって、迷い・苦しみ・悩み・争いの絶え間ない世界である。そこではみにくい争いが、くりひろげられている。彼岸は理想の世界であって、布施・持戒・忍辱などの六

波羅密を修すれば、世俗の迷いをはなれ、彼岸に達することができる。彼岸こそは誰もがのぞむ理想境であり、静かに一日たりとも修養の日がおくられるようにと念じて、自からの修養につとめる。その日が彼岸であって、日本では春分と秋分を中心に、一七日の別時の供養をすすめる。そして祖先をうやまい、亡き人をしのぶ。

今日彼岸菩提の種を蒔く日かな

蕪村

まけよ蒔け仏の種も彼岸から

鬼貫

うとく／＼と彼岸の法話ありがたや

静雲

一日は震災記念日。大正十二年九月一日、関東地方の一円をおそった大地震は、午前十一時五十八分昼食の仕度で火が用いられたことも手伝い、たちまちのうちに火の手があがり火事を誘発。九万余人の死者と、五十二万七千にのぼる家屋を一瞬のうちに失った。避難地を求めて逃げまどい、命をたった人の中には、本所被服廠跡に集まり、時に風速七八十メートルに達した旋風のために、須臾の間に人命をうばわれた四万人の人たちがいた。その後昭和五年この地に震災記念堂が建てられ

たが、その日から今年は四十三回忌にあたる。

八日には太田大光院で開山忌がつとまり、十日はお月見。大光院は吞竜さまといわれ、又子育吞竜とも呼ばれる浄刹で、開山は吞竜上人。彼は武蔵岩槻に生れ、十四才のとき林西寺の岌辨について出家し、江戸におもむき増上寺の源普存より宗脈を相承。その後林西寺に帰住し、ここに居ること十七年。その間請に応じ、相模に来迎寺・武蔵に長福寺を建て、又滝山大善寺にも住したが、彼が大光院に入ったのは、慶長十八年のことであった。元和二年一武士が禁制をおかして鶴を殺し、来って助命を懇願したとき、武士を剃髪せしめ、共に信州小諸にかくれたけれども、同七年許されて帰院し、同九年寂したという。在世時から道俗の帰仰多く、今に吞竜さまといわれ、開山忌には門前市をなし、参詣の善男女はすこぶる多い。

お月見は陰暦八月十五日の月を名月と称して觀賞するのであるが、八月は秋九十日の真中であるから、八月を中秋といい、この月を中秋の名月と呼んでいる。古来文人墨客は、月下に清宴をはって詩歌をもてあそび、その

美感にひたり、情趣をあじわうのを例としたが、月見の嚆矢は平安時代の頃らしく、寛平延期の世には、朝廷はじめ官人文人の間では盛んにおこなわれていた。村上天皇が「月毎に見る月なれどこの月の、今宵の月に似る月ぞなき」とうたい、紀貫之が「月ごとにあふよなれどもよをへつつ、今宵にまさる影なかりけり」とよんだ歌には、八月十五日夜の他の月にまさって美しいことが、詠みあらわされている。かくや姫が月に召されたのも、天女が三保の松原であそんだのも、八月十五日の日であつたらしい。

名月や池をめぐりて夜もすがら 芭蕉

何着ても美しうなる月見かな 千代尼

そして彼岸を迎える。この頃宗教行事は多い。藤沢遊行寺の開山忌、永平寺の御征忌も二十三日からつとまり、遠州の奇祭「桜が池御檀納め」も中日の行事。大阪四天王寺の西門は極楽の東門と向きあっているといわれ、昔からここに来て落日を拝する風があり、今でも彼岸のころ、ここに参詣する人はあとをたたない。お檀納めは、静岡県小笠郡浜岡御佐倉の桜が池でおこなわれる祭事で、この池

には流れ入る川もなければ、流れ出る川もない。澄むともなく、濁るともなく、千古神秘の深い色をたたえ、池底は諏訪湖につらなるといわれ、池には竜神が住んでいると信じられている。その昔、法然上人の師功德院の皇



震災記念堂

円阿闍梨は、比叡山の碩学とうたわれた学匠であつたが、老来たり死を前にして、なお成仏の奥義を解することのできないのを歎いていた。そこで今の世において解することができないならば、釈尊滅後五十六億七千万年の

のちに出世して、一切衆生を済度すると伝えられる弥勒菩薩の竜華会にあつて救われたいと悲願し、毒蛇に化して時を待とうとされた。竜はこの世で最も長く生命をもちながらえるものと信じていたからである。その結果竜蛇の住むところをさがし求め、ようやくにして探しあてたのが桜が池であつた。池は竜宮に通じていると信じられていた。皇円は嘉応元年（一一六九）六月十三日の夜示寂せられたが、時に桜が池の水を盛った器にわが身をうつして、この池に入定したという。

後日、法然上人は師の跡をとむらうため、ここに来て、師のため「念仏さえとなえるならば、誰でも往生できる道を発見しました」と、専修念仏の道を説いたけれども、皇円は自分の誓いを守って、永く竜神のまま百万の衆苦を救おうとする意志をまげなかった。で、法然は檜の櫃に赤飯を入れて、師のために厚く供養することにした。これが「お檀納め」の由来であつて、法然上人にまつわる行事としては面白い。「暑さ寒さも彼岸まで」彼岸もすぎれば、秋のそよ風は、肌にくれて一きわ涼しさを感じるようになる。

お釈迦さまと阿彌陀さま

五重相伝雑感 その一

渋谷 賢 応

茅野市仏教会会長

あるお寺の五重相伝の正伝法の朝、要偈道場入堂のため集
会堂にて調読の際であった。行人係の私に若い青年の愛者よ
りこう云うことを聞かれた。

「和尚さま、ちょっと聞きたいんだが、」

「はいはい」

「このお経本の四奉請と言う中に、奉請阿彌陀如来入道場散
華樂と、奉請釈迦如来入道場散華樂と書いてあるんだが、お
釈迦さまと阿彌陀さまとは今まで同じ人だと思っておったん
だが、これを見るとちがうように書いてあるんだが、ちがう
人かい。」

「それはちがう仏さまですよ。」

「どうちがうかわからんもんで、いまにお説教でその説明

があると思って一生懸命になっ
て聞いていたんだが、どうもそ
の話が出て来ないようだし、今
日一日でお説教もなにも終るっ
て言うんだが。」

「ああそうですか、一口に申
し上げれば、お釈迦さまは阿彌
陀さまと言う仏さまをお説きに
なった方ですよ」

「ああそうか、お説きになったんですか。」

「今は入堂しなければならんでくわしくは申し上げられ
ませんが。」

「ああそうですか」

その方はわかったようなわからないような顔をして調読を
待っておられた。

この方は常に非常に熱心に勸誡を受けておられ、ノートを
持って要点を書いておられた人なのである。勸誡に於て聞き
もらしはまずまずなかうと思うのである。その人において
この通りである。他の大衆はおして知るべきである。どこか
に、何かの、大きな齟齬が介在しなければ、このようなこと
はあり得ないと思われたのである。

今ここに私は、浄土の相伝を云々するつもりも資格もない。そんな大それたことのできようはずもなし、それは吉水正流の末席をけがす者として、狂気の沙汰である。

しかしながら、實際化他五重の席において前述のような実例が出てくるのである。私は化他五重に随喜すること自坊をふくめて十一回、いつも未熟ながら喜んでお手伝いをさせていただいている。数多くの諸大徳の勸誡を受者とともに受けて来た。しかしながら常に思うことは、受者の立場に立つとき、どうしても不得要領なのである。相伝の形式は伝統による。それでこそ相伝の相伝たる意義がある。しかしながら、なんとしても形式が前時代的なのである。その第一はテキストがない。成程制戒にあるごとく、「無相伝、輩、血脈書籍不可令_レ披見_二之事_一」ではあるだろう。又「口伝之趣不可_レ口外」でもあるべきだ。しかしながら、テキストのない勸誡は畢竟前時代的であると思うのである。今の時代に於て、公民館の文化講座も、テレビの学習講座もテキストなしではあり得ない。創価学会の学習を見るがいい。わかるわからないかは別にして、あの独断にして難解な「御書」をテストまでやって学習させているのである。三巻書をそのまま使えと云うのではない。何か受者向けの抄述の書があつてしかるべきものと思うのである。私は五重相伝に於て、受者には愚鈍念仏

の真髓を伝えるべきであるが、やはり浄土勤行式を読み得るまでにしてこそ、その意義があるべきものと思つてゐる。その意味からすれば勤行式をテキストとして充分と思う。香偈に於ては仏前作法を教え仏壇のあり方を説く。それは正伝法、焼香の伝に通ずる。三宝礼に於ては篤敬三宝の精神を説く、四奉請に於ては釈迦、弥陀二尊を始め十方諸仏菩薩の来臨を説く、懺悔偈に於ては身口意の三業、十善戒を説く、これは剃度、懺悔道場に通ずる。発願文に於て善導大師の伝燈分を説き、二祖相伝の対面を説き、二河白道を妙釈を説く、然して三尊礼の出所を説き六時礼讃の趣きを伝える。一枚起請文に於ては三心四修の末代念仏授手印、第二重、領解鈔の結帰一行三昧、等を総撰し、要偈、密室の各道場に及ぶ、元祖大師の伝燈分を説くは勿論である。総じて浄土宗の説法は字句の解釈をあまりしない。直指人心をとなえる禪に於て語録をあやつると云うことが禪ブームの発端となつてゐるとしたら、これ又無関心ではおれないものを感じてゐるではないか。五重相伝会は浄土宗布教の真髓であり、古来先徳のきずき上げられた念仏弘通の最終的なきめ手である。地方寺院に於ては寺門興隆の礎ともなつてゐる。軽々しくあげつらうべきものではない。それなるが故に魂のこもつたものであらねばならぬと思うのである。大方の譴責を待つや切である。

家康と三河一揆



鶴田 湛 泉

三、家中の分裂

先に今川氏と交を断つことの不利を極力説いて自説が入れられなくなるや、上野城に籠って岡崎城へ出仕もしなくなった親今川派の巨頭酒井将監忠尚は、家康の父広忠の時代にも、石川安芸守、酒井正親ともそりが合わず上野城に籠って主君広忠に叛旗をひるがえしたことがあったが、その時は忽ち城陥ち忠尚は降りのち許されて上野城にいた。

そんな前歴のある忠尚は、その後も家康の政策にとかく憤懣を抱いていたが、この一揆を利用してかねての野望を遂げんものと叛意を露骨に現わし初め、先ず熱烈な門徒信者である本多弥八郎正信を語らい彼を腹心として万事を画策するに至った。忠尚等は次いで吉良義昭を擁立することに成功すると、更に荒川甲斐守にも誘いをかけた。

東条の城主、吉良左エ門義昭は、先に城を攻められて家康に降り岡山に蟄居を余儀なくされ無念に思っていたが、世の変動もあればその時に乗じて家を再興せんものと時節を伺っていた。それ故、松平家の実力者である忠尚のすすめに、この家中の動乱こそ天の与え

る又とない好機とばかり叛意を起すに至った。八面^{ヤツオモテ}の城主、荒川甲斐守頼持は、先に吉良の一族をはなれて降伏すると、酒井正親を手引して西尾城を攻陥したので、彼の忠勤の功を賞した家康から妹婿として殊遇されていたが、どうした心境の変化からか郎党と共に一揆に与するに至った。

三河の松平一族には、十八の松平家があった。桜井の松平監物家次、佐崎の松平三蔵信次、大草の松平七郎昌久等は、いずれも歴とした十八松平家中の一族であるが、未だ三河に於ける地位が確固ではなかった松平の総領である家康の支配権を奪うとしたのか、一揆に与するに至った。

松平三蔵の屋敷は佐崎の上宮寺の近隣であったが、内濠を深め石垣を高めて砦を堅固に構え初めた。

「おれも世に出られるぞ」少し才幹のある者としてはこう思うのも当然で、実力が物をいう戦国時代のことであるから、虎視眈々たる彼等が一揆を利用して己の野望を遂げようと考えたのも無理はない。

酒井将監忠尚に従った者は、家康より四才

年長の客氣満々たる本多正信を始め安達左馬助、同弥市郎、鳥井四郎左エ門、高木九助、荒山兵エ、榑原七郎右エ門、大原左近右エ門近藤伝四郎、酒井作エ門、鳥居金五郎等のいずれも家康の功臣である。

この時、鳥井金五郎はたまたま熱病にかかつて身体も動かせぬほどの病状だったので、一揆に与して力を協わすことが出来ないことを口惜しく思つて、祖師親鸞上人に申しわけがないとしきりにうわごとを云っていたが、やがて病を押して上野城へ馳せ入ったほどの狂信者であつた。彼の熱狂的な態度が人々に大きな感動を与えて、彼に励まされ一揆に与する者が更に増して来た程であつた。

その他、石川數理広成は小川の砦に、夏目次郎右エ門は野羽の古城により、上条では芦谷吉太夫等が一揆軍の一翼となつて戦うこととなつた。

問題を起した上宮寺へ馳せ参じた者は、倉地平左エ門、馬場小太夫、石川新七郎、小谷甚左エ門、太田源太夫、加藤平之助、安藤次右エ門、戸田三エ門、等松平家とは切つても切れぬ家臣二百余人。その中には水野下野守

信元の家臣矢田作十郎も一揆の將として加わっていた。この時、一揆に与して戦つた上宮寺の末寺は五十一ヶ寺であつたという。

針崎の勝鬘寺には、蜂屋半之丞貞次、久世平四郎、波切孫七郎、寛助太夫正重、近藤新一郎、渡辺玄蕃、同源蔵、同半蔵守綱、その父源五左エ門高綱、本多喜蔵、土屋長吉、加藤次郎左エ門一族、其の他百余人が立て籠つた。上宮寺の末寺は七十ヶ寺も加わつた。

野寺の本証寺には、大津半右エ門、犬塚長左エ門、同八兵エ、其の他石川党、加藤党、中島党、本多党など百余人、輕輩に至つては無数であつた。

野寺村は矢作川の流域に立し西三河平野の中心地帯で、吉良一帯の武士と本証寺周辺の武士が加わつたが、本証寺と行動を共にした末寺は百三ヶ寺の多きに達した。

土呂の御堂の善秀寺には、大橋伝十郎、石川半三郎一族十名、本多甚四郎、成瀬新蔵、佐橋甚五郎、山本才蔵等百余騎が集つた。

こうして上宮寺など四ヶ寺を要害の城廓として立て籠り、七ヶ寺の住持がそれぞれ一揆の大将となつて指揮することとなつた。

門徒は弥陀を念ずることによつて、未來往生という安心が与えられている。云わば門徒は、弥陀の子となり本願寺を頂点とする新しい關係の一員となつていたのである。その信仰が純粹であればあるほど本願寺が中心となり、それがため彼等の現世に於ける支配者の權威を然視せしめ勝ちになつていた。それ故にその地区に於ける門徒の勢力と組織が大きくなればなるほど、門徒の支配者への抵抗が増大するのは当然である。これまでも最も真宗の發展した加賀に、長享二年、守護富樫氏の勢力を廢除して門徒による領國を建てようとして加賀一揆が起つたのもこうした事情からであつた。

而し本願寺としては、門徒のこうした動きに対しては極力阻止につとめていた。このため蓮如は、地方に目付役の寺院を置いた程であつた。

真宗寺院及び門徒の統制をより確實なものにしようとして本願寺の近親者が住持となつて地方寺院に配置されたのを一門、一家の御坊と称したが、蓮如によつて建てられた土呂の本宗寺は、この一家衆の寺院であつた。

運如の孫に当る本宗寺の実円（本願寺第九代実如の子）は幼少な法主証如（第十代）を補佐して本願寺教団の中央に於ても中心人物となつて働いたほど実力者であつたが、彼は三河門徒の支配者に対する大小の摩擦をよく押え反抗を阻止して来ていたのであつた。ところが実円は既に八年前に寂していたため、上宮寺を始めとする強力なる三河真宗教団の統制は実円の在世中のように行かなくなつた。

本宗寺の三河における立場は重要であつたが、有力な実円という目付役を失つて、門徒の支配者に対する反抗機運が刻々に増大しつゝあつたのである。

四 一揆備え

一揆の対策をいかにすべきかと、持仏堂にじつと坐つて考えつづけている家康の丸い血色のよい温顔にかかわらず、胸の中では憤怒の焰がどれほど噴いていたかわからない。

今までは自分と家臣とが、親愛と信頼が深く、互に心が通じ合つていたのと思つて、ジリジリした気持になつてギリギリと指を噛んでいたことであらう。

一揆鎮圧の戦を起してしまえば、敵に廻さねばならない多くの家臣がいる。彼等はかつては若き主君のため、幾度か身命をおします戦つてくれた三河衆である。いかに憤怒しても、本をただすと可愛い我が家臣である。何とか反省さす方法がないものか。解決の糸口をどうかして見付け出したい。一兵をも損しないで円く治まる方法はないものかと、幾度も肝胆を碎いて来たのだったが、將に一揆勃発の一触即発の危機の今となつては、家康としても、一揆に対して配備を怠るわけには行かなくなつた。

先ず一揆の主謀者と目される上野城の酒井將監忠尚に対しては、新に砦を築いて家臣中第一の戦い上手であり豪勇の誇れ高い酒井左エ門尉忠次が、彼の往来を監視することとなつた。又、嶺ヶ嶽に砦を築き、刈屋城主水野下野守より加勢として百二十人を卒いて来た水野三左エ門、同四郎左エ門の両將を籠め上野城を押えしめた。一揆の拠点である佐崎の上宮寺に対しては、小栗大六、同右エ門貞高小田清七郎等を將とする百数十人が当ることとなつたが、更に佐崎の東隣の渡り村に住す

る鳥井党がこの押えとして砦を堅固にして守つていた。尚西北に当る桑子の妙源寺と手を握り、妙源寺に砦を築いて安藤、長坂、神谷都築等が陣を張つた。

土呂、針崎並に東条の敵兵と戦うために、土井城を本多豊後守広孝が守り、二陣として中根党が待機していた。

野寺の一揆、荒川の兵に備えて、酒井正親が西尾城で対峙していた。

松平一族では、長沢に松平上野介康忠、御油に松平弥九郎景忠、竹谷に松平玄蕃頭清善形原に松平紀伊守家忠、深溝に松平主殿助伊忠がそれぞれ居城にあつて待機していた。

石川伯耆守数正、本多平八郎忠勝、平岩親吉、鵜殿十郎三郎長祐等は、家康の左右にあつて岡崎城を守り、一揆への策戦を練つた。

野寺、佐崎は岡崎の西南一里ばかりの地にあり、酒井忠尚の上野城はその西北にあつた。土呂針崎は、岡崎の南方一里余であつたが、その中間の上和田に、大久保忠勝始めその一党が砦を築いて固く守つていたため、一揆も容易に近づき得なかつた。

こうして家康の家臣が真つ二つに分れ、そ

他の三河武士もそれぞれの利害の上に立つて、或は一揆側に或は家康側に加担した。

利害の上に立つて双方に分れて加担したというが、そもその原因は、若い家康が果して一揆軍を破り得て三河領国大名としての地位を保ちつづけて行くことが出来るのか、更に又将来大きく飛躍することが出来るかどうかとの見通しが、武士門徒等に早急につきかねたのが実状でもあった。

家康の武将としての運命の見通しがつきかねて双方に分れたのであって、刈屋城主の水野信元と末弟の藤十郎忠重（後刈屋城主）及び相掣の水野太郎作清久とは家康側についたが、信元の次弟信近は一揆側に加担した。水野の外にも、父子兄弟一族が両派に分れて戦うという悲運になったものも少くはない。

更に信仰という点に去就を決しかねたものもあったが、真宗から断然浄土宗に転宗して主従関係に生きる道を求めてよく奮戦した本多重次の如きものもある。

戦国の武将として擡頭するためには、二つの心構えが是非とも必要であった。その一つは、氏族の内部家中をガッチリ固めることで

あり、今一つは血族結束しよく家中を統制して他の氏族に対して、自己をはっきり主張することであるとすれば、今までの君臣の団結が完全に瓦解されてしまった家康は、武将として一大危機にさらされることになったのである。一揆勃発というより、夢にも思わなかった領内の家臣と領民との叛乱に等しいものであったし、而もその軍事力は、家康に勝るとも劣らぬほどのものを持っていた。

ようやく緒につきかかったばかりの家康の事業の挫折となるかも知れない。それどころか岡崎城の弱体化を見て、内政多端の隙に、何時今川方が突いて来るかも知れぬ恐れがあった。氏真がたとえ暗愚な凡将であったとしても、この動乱を見のがすはずがない。それに衰えたりとはいえ、今川氏の兵力は強大あなどり難い。東三河への攻略を一時延期せねばならないのみか、今川押えを強化しなければならぬ状況となった。

岡崎より東方に当る長沢までは三里であったが、それより東は今川領で、敵領に接した長沢の城主、松平上野介康忠は未だ十六才の若年であり兵力も僅少であったので、今川氏

がこの虚に乗じて来襲する時には、容易ならざる事態となるのは自明であった。それ故今川側の動きを封じるため家康は思慮をめぐらし、東三河の諸豪族諸將に使者を立て、領内の難儀を卒直に訴えて、今川押えのことを頼み入れたのである。

かねてから、家康を若城主ながら末頼もしく思っていた東三河の三家衆、築手の奥平美作守貞直初め、菅沼の西郷左門清貞、設楽の越中守らは、祖父清康以来の好もあって心よく人質を岡崎へ差し出し、それぞれ居城にあって今川押えとなろうと幸にも忠誠を誓ってくれた。

更に伊奈城には本多忠俊を籠め、その附近の小坂井糟塚にも砦を新しく構えて、今川方の吉田城の押えとした。

とまれ一揆の主体は、上宮寺の僧徒を中心にして、戦に飽いた農民が領主の勢力から離脱しようとした抵抗とも一面考えられるが、これに家康の直属の家臣でありながら、門徒なるが故に主家に反抗したものもあり、更に東条の吉良、荒川、酒井忠尚、大草の松平等の如く一旦家康に服属していた土豪等がこの

機を利用して自己の勢力の挽回を計ろうとして加わったものもあり、又日頃から反松平の立場にあったものが、この機に起って抗争したものもある。或は又、有力なる一門、又は武將豪族で一揆に加担して家康に斗争したものもあるように、一揆の構成分子は種々雑多であった。これが後では、一揆の壊滅を早めた原因ともなったが。

ともかく、一揆の勢力によって未だ確固とはいえない家康の支配権を、一挙にその手から奪取しようとする活発な動きとなった。よく組織された門徒農民は、土豪にも劣らぬ戦斗力を持っていたが、よき指揮者に欠けていることを心細く思っていた矢先き、こうした有力なる武士団が加わることによってよき大将を得たと悦んでいた。まして吉良や荒川が一揆に加わったことは、百万の味方を得たように力強く思った。

何と云っても、一揆の中心は一向門徒である。彼等はいずれも不惜身命、死なう一定の浄土への栄光をめざして、信火に燃えている熱狂の信者である。主君と申すは僅かこの世現世ばかりのものである。それに反して仏祖

記主忌御親拝随行記

安居香山



鎌倉、材木座の裏山は、すがすがしい海を前に控えて、風光明眉である。遠く海をへだてて江の島が見える。或る観光会社がこの材木座の山と江の島を結んだ空中ケー

迂濶なことに知らなかったが、偶然の機会に、この墓所に、三代上人への報恩謝徳ができたことは、もっけの幸いであった。

七月六日の記主忌は、大本山、光明寺の開山忌でもあり、厳かに法要が修行されている。この日、浄土門主自から御親拝になるのであるが、遠隔の地の事とて、関東在住者をして代拝せしめられるのが、ならわしとなっている。今年には佐藤良智僧正（大正大学教授）に御下命があり、御代拝となり、私はそのお伴をすることとなった。

佐藤僧正は、鎌倉の大仏、高德院で威儀を正された。誠に重責である事とて、身を清め、衣、袈裟等もすべて新調され、緊張の面持ちであった。随行したのは佐藤密雄大正大学々長以下数人であったが、心からの御代拝にふさわしい一行であった。

ブルを企画した事があるそうであるが、いかにも考え出しそうな好適の地である。そんな山の中腹に、よくもこんな大きな墓石をと思われるほどの記主禪師の墓碑がある。七月六日がその御命日であることも

光明寺に着くころは、已に県下の僧侶方が参集され、開山忌が始まるばかりであった。広い境内は掃き清められ、長い歴史に

如来は、未来永劫を頼むところの一大事の本尊である、深く教え込まれ信仰にこり固まっているから始末が悪い。宗門の一大事とばかり、上宮寺等に馳せ集って来た総勢は参千を超えていた。

この多くの同志を集めた成功に悦んだ僧徒等は、心を更に堅固專一にすべしと、木札に進^み足者往生^し極樂世界^に退^き足者墮落^す。無間^の地獄^に。

の要文を記し、槍の千段巻や、甲の鉢巻に短冊のようにさげさして鼓舞した。

元来、素朴純真な武士や農民は、宗門の外には大事なしと思ひ固まっていることとて、この有り難い要文の札を授った上は、仏恩報謝に、ただ討死して極樂に往生を遂げんものと、信仰の焰に燃え上り歡喜勇躍しながら、六字の名号を高らかに、呪文のように唱えながら、まるで濁流の奔騰して行くように、何時岡崎城へ攻めよせるとも計り知れない状勢となつて来た。

くすんだ山門や、本堂は、記主上人の徳を偲ばせることき立たずまいであつた。長い廊下づたいに僧侶分の列がつづき、大野法

道大僧正の導師のもとに、法要がはじまつた。御代拝は、この読経中に行われ、終つて、参拝者一同に授与十念が行われる。御詠歌衆の婦人方が多く参詣しておられ、厳かに式は終了した。その式は極めて簡素であり、賑やかさ一つない静かなものであつたが、私はこの古式ゆかしい儀式の中に、吉水の流れを汲む一人として、長い間行われてきているこの御親拝御代拝の儀式を、この上なく意義あるものと、思ひを新たにした。浄土の教えは法然上人に始まり、三代記主、七代聖間へと、受けつがれて、今日に至っている。三代目で亡びるか興るか決定されるということは、歴史の消長のシンクスであるが、三代記主禪師は、その意味では浄土門流の重要な位置を占められたわけである。今日、吉水の法流があるのも、この三代上人あつたが為と言っても過言ではなからう。三代の記主忌に御親拝が

行われているという事も、その意味で意義ある事である。

一同、終つて、山の中腹にある墓所に参詣した。急な坂道であつたが、折から一陣の夏雨が、降り出し、山の塵埃は洗われた。その中を、蟬の聲が、遠く近く聞えた。大きな記主禪師の墓の右隣りには寂恵上人の墓もあつた。清掃された中で、一同は傘をさしながら廻顧した。今日、浄土の法門は、決して平々坦々の道を歩んでいるとは言えない。それは、仏教会全体の事でもある。時代の流れと共に時代に生きた法門が、伝統の教えを基礎として打ち立てられて行かねばならない。記主上人は三代なりにそれを打ちたてられたに違いない。七代の問師も、それ以後の歴代上人も、すべてそうであつた。今日これを受けついだわれわれも、またそこに思ひ至るべきである。何か深い感懷に打たれているとき、雨は一きはげしく降って傘を叩いた。何か、私の感懷に、一段とはげましをするかの様に。私は、深く、深く、墓前にぬかずいた。

良忠門下の分裂と発展

鈴木 成 元

（大正大学講師）

良忠の門下には多くの弟子達がいた。そして良忠の在世時代には別して争議もなかった。これは当然で、法然の場合も同じである。けれども良忠が入寂すると間もなく分裂してゆくのである。その代表的なものは藤田性心・木幡慈心・名越尊観・一条礼阿・三条道光・白旗良曉の六派である。もちろんこの他にも独立した人々は沢山いる。しかしながら、これらは一派を形成するところまではいってない。また六派に分かれたこれらの派名も、この当時にできたものではなく、後世これらの派祖達が居住していた地名にちなんでつけられたものである。

この六派を形成した六人の弟子のうち、一番古い弟子は性心である。性心は康元二年（二三七）のころすでに良忠に師事していた。そればかりではなく、良忠の代筆をするという重

要な位置にあったのである。建長六年（二五五）から正嘉二年（二五八）までにおける良忠は、下総・上総方面を教化しているときであり、『選択伝弘決疑鈔』『三心私記』『群疑論見聞』『決答授手印疑問鈔』『伝通記』などを撰し、『往生論註』『定善義』『法事讃』『群疑論』『往生礼讃』などを講義するという、活発な浄土教布教に入ったときであった。この時良忠はすでに六十に近かったけれども、八十九歳で入寂する良忠の生涯では、最も積極的な、しかも自信に満ちた行動を實踐した時代であった。性心はこの時代に良忠の手となり足となって活躍していたのである。だから性心は当然良忠の教義を理解し、多くの付法を受けていたことであろう。そしてその自信はやがて『授手印決答見聞』を書くようになり良忠からの口決を弟子の良心に伝授することにもなるのである。

る。論争として表面には出さないが、性心にすれば、自分こそ良忠の後継者と思っていたに相違ない。そして事実それを行動に移していたことはいうまでもない。

良忠が下総から鎌倉に移っていた文永八年（一二三二）に、良曉は叡山を下りて鎌倉にきた。そして建治二年までの七年間良忠について浄土の学問を学ぶのである。このころにおける良忠は京都でも相当に有名であったようである。そこで良曉の下向した翌年には慈心や礼阿が京都から鎌倉に来て三年間良忠のもとで学ぶのである。しかし、この時奥義の免許とも



良忠上人木像（鎌倉 光明寺）

いわれる附法状は授かっていない。良忠は建治二年、在京の弟子達から強い要請があつて上洛するのであるが、このころには尊観も良忠のもとで学んでいた。尊観は上洛する良忠に附法状を請うた。けれども良忠は許可しなかった。しかし良曉の口添えて附法状をもらったと良曉はいう。ともかく上洛するとき良忠が尊観に附法状を授けたことは事実である。

上洛した良忠は建治三年礼阿に『授手印』を授け、毘沙門堂阿弥の問に答えて『選択疑問答』を作り、弘安二年には道光に円頓戒を授け、翌年には『授手印』を授けている。そして五年には『安樂集私記』を作り、また『浄土宗要集』など多くの著述を残したようである。こうした生活を送った良忠は、弘安九年（一三六六）の秋再度鎌倉に帰り、良曉に多くの附法状を授け、翌十年七月六日に入寂するのである。

良忠から附法状を伝授したこれらの人々は、それをまたそれぞれ自分の門弟に伝授していったことはいうまでもない。しかもその伝授は、自分こそ良忠の後継者であるという強い信念で伝授しているのである。つまり、これらの六派の祖師達は、それぞれ自分こそが鎮西流の正統を継いだものであるという気持で弟子達に附法を行ったのであり、附法を受けた弟子達も、自分こそ正統であるという気持で血脈を作つてゆくのである。こうして良忠門下の正統性を主張する血脈は六

つの系統に分かれていった。それは単なる血脈の相違だけで片づけうる問題ではなく、当然教義面にも関係してくるのである。その最も表面に表われたのが名越尊観と白旗良曉の論争である。良曉は『述聞副文』を書き、尊観は『十六ヶ条疑問答』を書いて、それぞれ自分の正統性を主張したのであるが、教義面というものは簡単に和解のできない問題であり、この後明治時代までくすぶり続けてゆくのである。

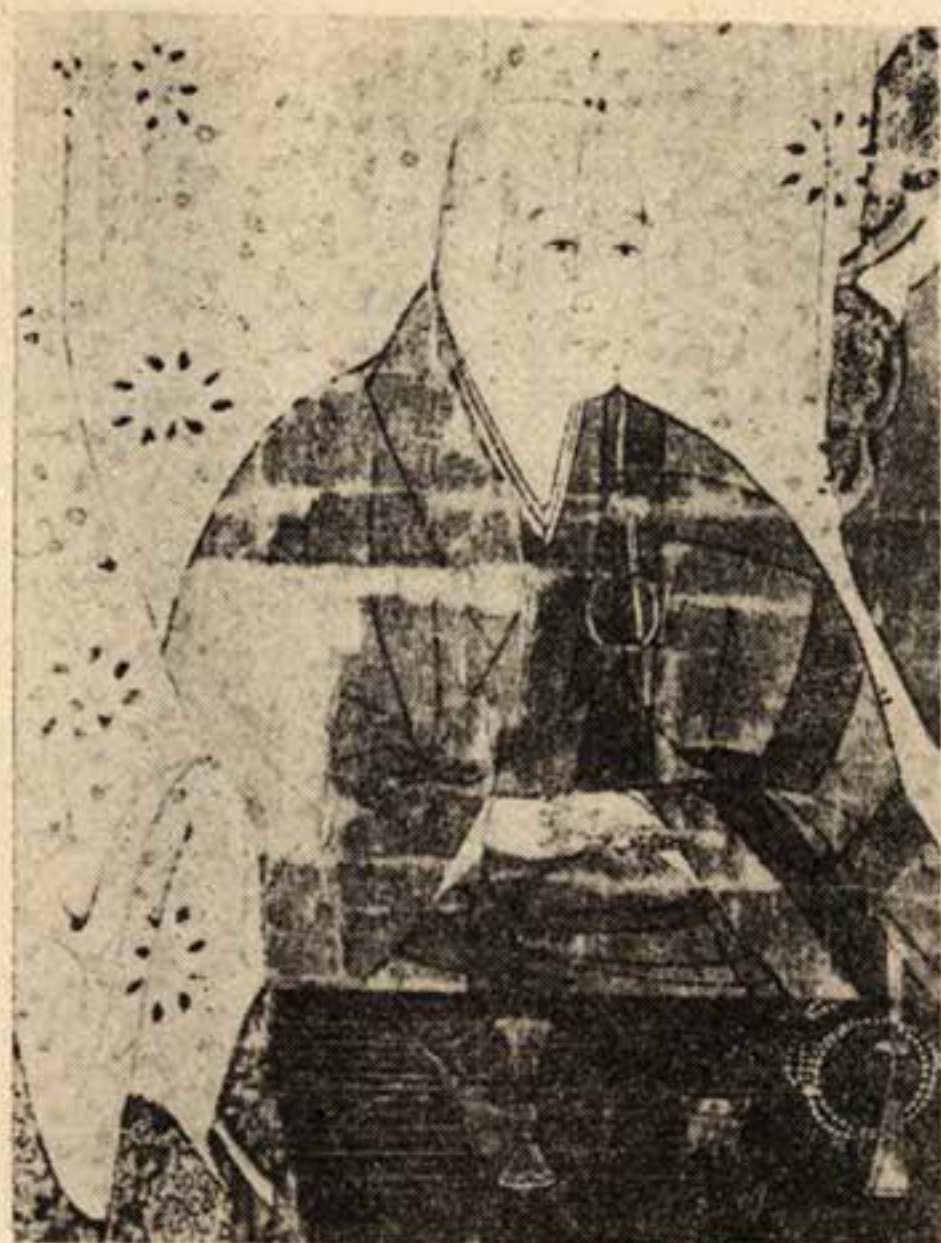
正安四年（二三三）十一月、尊観は弟子の境智に『授手印』を授けたが、その奥書に「自分が伝えるものは良忠から授かったものであるが、それは聖光から良忠に授けたもの」であるといつて、自分の正嫡を主張している。一方名越派の良栄の『十六疑問答見聞』によると、良曉は学問がきらいで方々を遊び廻ったので良忠は歎き悲しみ、慈心に附法状を授けて後継者とした。しかし、その後良曉は修行を積んだので附法状を良曉に渡したといっている。これは年代的にも内容的にもおかしい。附法状は一人の弟子にだけ授けるものではないからである。

『述聞副文』の中で良曉がいつているように、尊観は慈心を自分の弟子といていた。しかし、慈心は良忠の愛弟子ではあるが尊観の弟子ではない。それを弟子にしたてることは論争の渦中に慈心を引き入れ、良曉を下げすみ自分の正統性

を主張する手段にしたにはほかならない。しかも慈心が入寂した後には主張するのであるから、慈心こそいい迷惑である。

良曉は名越派で宣伝するような愚鈍ではなかった。彼は六派の中最年少というハンデはあったが、実子である誇りと自信をもって布教に専心したのである。そして他の派祖達には見られない、いや想像もつかない口決（口伝）とともに、良忠から授かった『決答授手印疑問鈔』をも授けていたのである。これは非常に強い迫力となったのである。さらに彼は良忠の附法状にはなかった「吉水の正流」「鎮西の余風」という文句を入れて弟子達に伝授していったのである。

京都方面に教線を張った礼阿・道光・慈心の中、一番隆盛をみたのは一条派の礼阿である。学問的には、法然の著作・手紙等を集録して『漢語燈録』『和語燈録』などを作った道光の功績が光るが、後世傑出した弟子達が出て教団の発展につくしたのは礼阿の系統である。礼阿自身にはそれほど派ばつ意識があったとは思われない。しかし後を継いだ二代の向阿になると旺盛な対抗意識を発揮していった。彼は数多の弟子に『授手印』を授けたが、そこに長い奥書をつけて「吉水五代の嫡流」「浄土一宗の正義」とうたつて正嫡をあらゆる機会に主張していったのである。そこで弟子達も自然と自信を持ちつつ、更に強く主張してゆく結果になったのである。



良 忍 上 人 画 像 (京 都 知 恩 寺)

このように、良忠の入寂後、六派に分かれたそれぞれの門弟達は、自分こそが鎮西流の正統を継いだものであるという主張を続けていったのである。こうなると自然、二祖は聖光となり、三祖良忠の位置が確定してくるわけである。浄土宗の三代が確立するのは、教義的な面も忘れることはできないが、それよりも互いに自信を持ちつつ教線の拡張につとめた門下の働きを忘れてはならない。その個々の問題をとらえろと、宗教家という観念からはあまりにもかけはなれた、みにくい一面があったことも事実である。しかし、大観すれば、

これが宗教の特性でもあると私は信じている。

どんなに机の上で立派な考えをしても現実には役にたたない。理論的には実にすばらしくとも、それが社会に受け入れられて生かされなければ何にもならない。しかし世間の人々はややもすればこの理論に価値を求め、賞讃して止まないのは何によるのであろうか。東洋人特有の観念賞讃の思想という片づけうる問題ではないであろう。

現代の社会は何かにつけて仏教が批判的になっている。仏教の頽廃という理由もあるが、しかし裏がえして考えると仏教に対する関心が高まったことにもなる、僧侶は僧侶である自信をもたなければならぬ。それには僧侶らしい生活をしなければならぬ。「らしい」という言葉は「くさい」という言葉ではない。そして生きさものをさけたり、妻帯しなかったりすることではない。堂々と時代の先端をゆく生活でなければならぬ。ただそこに課される問題は、聞き伝える宗祖の教義でも何でも無い。究極は僧侶自身がいかに檀信徒の中に入り、いかに信用されるかである。頭のよい悪いではない。宗義をふまえ理論ぬきで実践する行動こそより尊いものと思ひ信じている。科学の進歩の著しい現代社会、医学の進前、月旅行など数えてゆけばきりが無いが、理論では割りきれない「愛」の問題をしっかりと考えなければならぬ。

創価学会の手引き

供養という寄附金

創価学会は金のかからぬ新興宗教だという事が、当初の評判であり、彼等自身もそれを呼号していた。ところが、この頃は大金がかかるらしい。

早い話が、聖教新聞も日刊となったのはよいが、二百円に値上りした。そこへもってきて、この頃は、無やみやたらに、いろいろな本を出し始めた。そして、これは是非買って読むべきものだと言っている。会長講演集など、戸田のも含めて大変な数になるが、最近出た牧口常三郎全集全五巻や、池田の「科学と宗教」「政治と宗教」なども、その一つであり、いままた小説「人間革命」という池田の書いた戸田会長伝の、第一巻が出た。

北条理事長は、

「われわれは、この人間革命をしっかりと読み、そこから学会の伝統、学会の歴史、また学会精神を学んでいこうではありません

か」(聖教新聞—第一一五六号)

と言っている。この「いいうではありませんか」という常套語は、「読め」とい

う語と、学会では同じなのである。誰でも、会長以下、班長にいたるまでが、この「いいうではありませんか」を、連呼するのである。「いやだ」とは、なかなか言えないものが、これなのである。会員も、この「いいう」で、大金をとられているらしい。

ところで、学会では「御供養」という言葉を用いる。大石寺に御供養するとか、日達上人に御供養するとかがそれである。何のことはない。会員から金を集めて、いろいろと寄附するのである。寄附金が、つまりは、御供養なのである。

学会では、一切寄附金はとらぬと言っていた。確かに寄附金は取らないが、御供養は取るのである。まさに、言葉の綾で、会員はだまされているわけである。

大客殿をつくる時、大っぴらにこの御供養が会員から取られ、相当な金が集ったらしい

大客殿を造って余った金で、土地を買って、大石寺に寄附をした程である。今度は、又本堂を造るという事で、大々的な御供養運動が展開されている。そして、聖教新聞は、毎日の様に、この御供養の意義と価値を説明し、献金運動に躍起となっている。

躍起になっているところを見ると、余り金集りがよくないのかも知れない。それにしても、御供養することは、幸福をつかむ近道だと強調しているわけであるが、これは裏をかえすと、御供養しない者には罰があたるということともなる。こうなると、強迫的寄附金である。

毎日の新聞や、座談会で御供養御供養といわれては、会員もたまらぬことであろうが、何でも目新しい表現により、人間の盲点をついたこの種学会活動には、今更ながら、感心させられるのであるが、一面、こうしたことが、どの宗教も通る一つの過程であってみれば、創価学会も、世間なみな新興宗教に墮落し始めたと言つてよいであろう。強迫的強要に逃げ出した人の話を、このごろよく聞く様になったのも、又当然のことであろう。

編集後記

▽例年なら今頃暑中御見舞申し上げる季節であります
が、今年は誠に涼しくど
しよい夏でこの点有難い
のですが、農作物にかんし
ては誠に心配であります。
▽現在の雑誌浄土の発行人
である大正大学学長佐藤密
雄博士は、説亮ランドにあ
る仏教聖地の月例法要の導
師を月遅れのお盆の八月十
五日に勤められました。
▽浄土の同人であり大正大
学教授の中村康隆先生は、
大正大学カウンスリング研
究所長として、大学主催の
カウンスリング夏期講習会
に毎日御出講されておりま
す。又、八月下旬には日本
宗教学会学術大会に御出席
のため北海道に御出掛けと
のことです。

▽大正大学教授の竹中信常
博士は今夏各教区の講習会
に講師として誠に御多忙で
ありまして、九月には、一
日に九州に行かれ、三日に
御帰京なさつて、五日には
米國クレアモント市で開催
される国際宗教史学会に御
出席のため羽田よりロシア
ンセルスに直行なさるそう
であります。
▽編集同人の安井香山大正
大学学生課長は、本年も京
都知恩院で九月一日から十
日迄行われる大正大学学生
の實踐仏教に同行とのこと
です。
▽同じく編集同人の宮林大
正大学助教授も、現在教師
養成講座の講師として毎日
朝八時迄増上寺に御出講さ
れてます。宮林先生も竹中
先生と同行されて国際宗教
史学会に御出席される予定
です。

▽三月下旬より病氣療養中
でありました編集同人の水
谷哲雄氏もだいぶ元気にな
り、一週に三日程浄土宗務
支所に出勤されています。
▽法然上人讃仰会の三十周
年記念式典は十一月に東京
と京都で予定されております。
雑誌浄土も十一月を特
集号として増頁し、また浄
土トラクトの出版も計画さ
れております。御期待下さ
い。
▽本年は大正大学も四十周
年なるようで、十一月一日
に創立記念式典を行うそう
で、そのあと記念祭の各行
事が行われます。
▽浄土編集部と致しまして
は随時に御投稿を歓迎致し
ております。特に御婦人の
読者の皆様に御投稿いただ
きたいと思ひます。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年八月二十五日 印刷

昭和四十年九月 一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区船田町一ノ二二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

